

DRAMA かながわ 別冊 2号

神奈川県演劇連盟事務局・横浜市中区福富町西通り52(横浜演劇研究所内) Tel.045-261-4866

DRAMAかながわに“僕らの演劇”という劇評を載せるページがあります。神奈川県演劇連盟加盟劇団をお互いに鑑賞し親睦を深めるとともに、より良い芝居創りに活かす目的で評価しています。今回、DRAMAかながわ別冊として多くの戯曲を一冊にまとめることにしました。秋から冬にかけて各劇団は一年の集大成として数多くの作品を舞台で行っています。連盟加盟劇団の舞台をDRAMAかながわで振り返っていただきたいと思います。

第十回神奈川県演劇連盟合同公演

文：劇団こゆるぎ座 奥津真理子

「御存知 遠山藤之丞一座 保土ヶ谷篇～産んだはずだよ忠太郎」

原作・演出：濱田重行 脚本：中村俊夫 補色・改稿：三木直史 12月14日～16日 於：神奈川県立青少年センター ホール



ほぼ徹夜状態で仕事をしてから新幹線に飛乗り「頼むから面白くあってくれ！面白くなかったら劇評どころではなく睡魔に負けてしまう」と思いながら駆けつけた『よこはま壺座第5回公演「御存知 遠山藤之丞一座」』。どうやらこのタイトルにある「遠山藤之丞一座とはよこはま壺座を知る観客にとって馴染みがあるようで客席は早い段階で温まった。最近仕事で本当の旅回りの一座の芝居を観る機会が何度かあったばかりなので幕開けの旅回りの役者の舞台シーンは実際の旅回り芝居さながらでとてもリアルで面白かった。しかし舞台が進むにつれ私の中に違和感が…。今流行のエンターテインメント時代劇という演出なのだろうか？カタカナ・英語・ダンス・AKBや選挙など時事ネタ満載で本格時代劇とは違う軽さがまるで新劇というより新喜劇のようでこれは観る側にとっては賛否両論。落語のような巧みな言葉遊びとは違い、笑わせてやろう・ウケるだろうという思惑が強すぎてせつかく気持ちが舞台に入ったところで冷めてしまう。時代劇の中でも特にこういった旅役者を題材にしたものならもっと純然と人情時代劇に仕立てたほうが芝居に集中できたのでは？現代語を使わないで

セリフにするとかダンスの曲も和テイストを取り入れるとか…違和感なく時事ネタをもっと生かす工夫も出来たのではないだろうか？他にも宿屋の女将はお引摺りは着ないし、たとえ大名でも室内には大刀は持って上がらないはず。これらは演出の意図なのか時代考証の足りなさなのか？また「おじいちゃんを探している子どもたちの登場」は12月を意識したサンタのパロディというわけでもなくただなんだったんだ？という疑問だけが残ってしまった。おぼつかない台詞に観客がハラハラする場面はうちの劇団も同様でアマチュアの甘えと初日のご愛嬌として反省するとして…ストーリーは解りやすく面白い良く書けたいい芝居だっただけに、チラシに『よこはま壺座の座長が「藤之丞」であり「藤之丞一座」「よこはま壺座」的な説明はあれど「御存知 遠山藤之丞」を御存知ではない私のような観客にとってはとにかく惜しい演出である。「時代劇」の部分より「軽さ」に拘った楽しい作品を目指した演出意図だったのか？出演者の芝居仲間として次回作が楽しみなだけに遠慮なく書かせて頂きましたが、あくまでもよこはま壺座の馴染み客ではない一観客の率直な感想としてご海容ください。

劇団よこはま壺座

「二人の長い影」

作: 山田 太一 / 演出: 濱田 重行

7月13日～15日 於: 関内ホール 小ホール

よこはま壺座2012年の夏公演は山田太一作『二人の長い影』（初演2003年民藝）。昨年わが劇団が合同させて頂いた『皇國ノ訓導タチ』に続き、またも「日本兵が登場する話であった。もっとも、「戦争」は前面に描かれない。運命に翻弄される一人一人の人間の弱さと、強さが、テーマであると言って良い。以前ある地域劇団の公演で同作品を見たとき、（戦争でなく）「老い」を扱った作品だと理解した。「戦争」を他の（受動的な）困難に置き替えても成立すると見えたからであり、「あの戦争」を語るなら素通りできない日本の侵略と加害に触れられていないからだ。



だが、「戦争」に引き裂かれた二人の男女が半世紀を経て相見えるラスト、半ば喜劇調に実は進行するこのドラマの最後の最後に男が発する台詞にご注目。結局両方の家族がうち揃うこととなる「再会の場面で、喜劇の幕切れのその言葉が、

喧噪にかき消えそうになりながら、悲哀の奥にある「希望」をたたえているのを観客はみる。背景となる大きな困難の中に、戦争もやはり含まれ得るのだと言う事はできる。

重層的な意味を持つラストシーンに感心しつつ、中心となる役者方、老女性とその夫、女性のかつて婚約者を演じた三（老）役者の、内面からにじみ出る「生」の香りに感じ入った舞台でもあった。

舞台は日本家屋の内側。空は遙かな時間を思わせる宇宙の青。夫と余生を送る夫人（久美）の元に一本の電話がかかる。戦争中の元婚約者からのものだった。以後物語は、現代の二つの家庭と回想シーンとを行き来する。夫婦宅には大学に通う孫娘や、聞書きに熱を上げる中年女性が訪ね、一方元婚約者のやもめ男（真吾）側では、週一訪問の男性介護士との艶笑談に「電話」の一件が上り、一人娘もたまに来てガミガミ言うコメディ仕立て。だが中盤、夫の心情吐露と求めに応じる形で久美が語り出すのが、壮絶な戦争（戦後）体験であった。旧満州国からの逃避行でのソ連兵による強姦事件、自ら体を提供して命を乞う光景、そして自分の肉親への殺害を目撃する。史実を切り取った証言として戦争の「醜さを突きつけようとした作者の執念を感じさせる。

ただ、「戦争」を今どの視点で、何ゆえ扱うのか、ということを考える。不合理が罷り通ってきた危険な時代、権力を思い、脆弱な個人を思う時、演劇は何をやれるのか。挑戦を続けてきた<壺座>さんにさらなる遠大な挑戦をリクエストしつつ筆をおく。

観劇をこよなく好む一演劇ファン 京浜協同劇団：河村はじめ

劇団河童座

「長靴をはいた猫」

原作: シャルル・ペロー 脚色・演出: 横田和弘

7月28日・29日 於: 横浜相鉄本多劇場

舞

（主役）はお客の子供たちと戯れていた。これから始まる世界の説明をしたり、登場人物の名前をつけさせたり、ちなみにわたしが観た回は



“浅田真央”という役名になっていた。このときは子供の発想力で脱帽しました。これが生で行う舞台の力であろう。自分がつけた役名が舞台上で呼ばれば否応なしに会場が盛り上がる。

舞台が始まるとファンタジーの世界、猫が二足歩行で立って話すという非現実の世界に入っていくことになるのだが、そもそも舞台が始まる前に主役の猫は話しが出来るのが成立しているの何の疑問をもたずに舞台を見ることになる。子供たちは猫の頭の良さに引き込まれる。うさぎを王様に献上し、最後はご主人を侯爵にしたてあげ、姫様と結婚させる猫の策略はとても楽しいものがあった。子供たちは笑ったり拍手したりと満足している様子だったし、猫を演じた屋井智里の子供との距離感がとても近いものがあり、非常に好感のもてる演技だった。

さて、子供にとって舞台は成立していた。しかし、わたしはどうしても「長靴をはいた猫」が理解できない。童話として舞台を観ているとシャルル・ペローの世界観に全くついていけなくなる。そもそも、なぜ長靴を履くのか…。タイトルにもなるぐらいだから何かありそうだけど、一切の説明はしてくれない。そして、なぜ猫を財産の分け前としてもらった三男を猫は姫と結婚できるまでサポートするのか。三男は何もしていないし…。猫はうさぎを捕えるのだが、うさぎは献上品で王様に渡す…猫が…、なんなんだこの世界は。こうやって疑問符を持たずことが狙いならわたしはペローにしてやられていることになるのだろうか。多くの謎は子供にしか理解できないそんな舞台でした。

演劇プロデュース『螺旋階段』: 緑慎一郎

横須賀市民ミュージカル

「Let's Sing! Swing!」 作・演出 横田和弘

8月18日・19日 於: 横須賀市文化会館 大ホール

今年も8月15日の終戦記念日を静かに迎えました。昭和の悲しい出来事は次第に人々の記憶の残像を薄めていきます。その日から3日後、そんな思いを持ちつつ、横須賀市民ミュージカル(スカミュー)の“Let's sing swing”の公演を観劇した。スカミューは横須賀青年会議所の「横須賀ブロードウェイ構想」のメイン事業として、今年で4年目を迎え、横須賀青年会議所60周年記念

公演として、関係者は熱き想いがあったと察する。

舞台は戦後の横須賀で、その象徴でもあった米軍の“EMクラブ”（下士官クラブ）と、その戦後の街に暮らす人々との人間模様である。EMクラブは将校の集会場で飲食はもちろんのこと、大きな劇場があり、そこで毎晩音楽などのショーが開催されていた。日本のジャズの発祥地とも言われ、日本のジャズ演奏家はこの舞台でアメリカ人相手に腕を磨いた。明治時代から、理容店を営んでいる私の母の実家はEMクラブの目の前にあり、理容師をしていたその関係で子供の頃はEMクラブの辺りで遊んでいた。入口の前で将校に“フレンド！”と言うと、クラブの中に入れてくれて、当時は高価なステーキをご馳走してくれたり、ショーを観させてくれた。それは今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。



EMクラブの説明が長くなってしまったので、舞台の話に変える。脚本、演出の横田氏はEMクラブやその辺りの戦後の様相を私と同様の記憶と同じく、舞台に忠実に表現して

いた。出演者は靴磨き少年、花売り娘、デモ隊、パンパン（外人相手のホステス）等、そしてジャズ演奏家。そのジャズ演奏家はジャズオーケストラとして舞台にのせて生演奏させた。ミュージカルでは生演奏で歌ったり、踊ったり、芝居と合わせる作業は複雑でセンシティブである。出演者の多くが子供達で、そのパワーも助長して見事なライブショーを作り上げていた。オリジナル曲の多種なリズムやメロディーがもう少しあれば、もっと良かったろう…

舞台のストーリーは、戦後の日本のアイデンティティや米軍と関係などは、子供が多い出演者とそのライン上である観客は理解できたのだろうか…？ あまりにもテーマを広げすぎて散漫になった感がある。その為に舞台上での情景描写が多くなり、本来あるべき内なる劇的な舞台はなくなってしまった。ミュージカルは音楽と演劇のバランスが難しいと実感させられた。

最後に主演の女の子の歌は一級品である。また、そのハーモニーをしたもう一人の彼女も素晴らしい。素敵なハーモニーでした。You got it!

ヨコスカ・ベアフットシアター
プロデューサー&アクター
三浦 正行

まりこ☆みゅーじあむ本公演

「朗読“おはなしころころ”」 演出 川井真理子
8月18日 於:横浜相鉄本多劇場

子供向けのイメージだったが「昔こどもだった人達」にも楽しめる、そんな世界だった。「おはなしころころ」は朗読と舞台上の風景が重なり合って進んでいくわ

けだが、その風景は、観客参加型で出来上がる仕組み。お魚を作ったり、いちょうの木にギンナンに見立てた風船をつけたり。大人の私ですら自分の作った道具が舞台に乗るのを観るのは楽しいもの。ましていわんやこどもをや、である。初めは恥ずかしがっていた子供達も、次々とかわいらしい魚を作って行き、ギンナンの実を付ける頃には「なんで最初につけておかないの？」とツッコミも入れつつ、いっばしの大道具係の気分をつけている風情。物語だけでなく、そんなやりとりも心を和ませてくれた。

一つ残念だったのは、せっかく描かれた風景をゆっくり楽しむ間もなくお話が「ころころ」と進んでしまったところ。宮沢賢治の物語を読む時、ふと本から目を離し、想像の世界を楽しむような、そんな間が欲しい時があった。アニメや絵本とは違う、立体的な空間の中で楽しむ幻想的かつ手作りのぬくもりのある舞台。その空間をゆっくり楽しみながら、お話が進んでいくともっと、描きたかった「宮沢賢治ワールド」が観客にも伝わったのではないかな…と思う。今回はその辺の工夫を楽しみに、期待したい。

横須賀市民劇場プロジェクト：神田聖美

"緑慎一郎とミュキーズ" プロデュース

「寿歌(ほぎうた)」 脚本:北村 想 演出:井上 学

9月14日～16日 於:神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

所 属する劇団が違うが、一定の力を持った俳優の舞台はテンポよく進みます。北村想作品はどれも軽快で面白くてちょっと心がくすぐられますから、私も若いころはすごく憧れました。



テンポがあり軽快な言葉のやり取りは若い人たちには魅力のある戯曲だと思いますが、そこだけに食いついてしまうと本来の隠れている大切なものが見えないままに終わってしまい、面白かったよねで終わってしまいます。やはり演出と俳優たちの葛藤を見せてほしい舞台でした。

今回の舞台の三人の役作りは同年代で構成されていますから、戯曲の持っている面白いリズムのずれや感性のずれから発生する、何とも奇妙な面白さが生まれてこないのです。たとえばゲサクはもっと爺さんだったらどうだろうか？ キョウコもより純真な娘をどう作り上げるか。それが見えてくるとゲサクとかみ合わない現実の面白さがより鮮明になるのではないだろうかそんなことを考えます。

一生懸命な舞台は好感は持てるのだが、演出と登場人物が三人の構成だから尚更時間をかけ、表面の面白さからぐっと奥に食い込んだ人の心みたいなのをえぐり出してほしいのです。創り手として何に心を動かされ何が心を駆

駆り立てているのか。この舞台の創り方はすべてリアルに構成するか、役者を白塗りにして観客に判断を任せるか。この戯曲の分水嶺の様な気がします。ゲサクは言葉のテンポに入れ込むあまり中身を取りこぼしているようです。ヤスオは小劇場の空間を意識して役を作ってほしい。装置の赤布にある挑戦をしたのかもしれないが、これではキョウコの一生懸命な踊りは伝わりにくい。この場合は素朴になればなるほど中身だけが伝わると思うから。残念なのは私には大切なホテルが見えない、ホテルへのこだわりが見えてこない。

創り上げる側に「見えない人間と、人が見える人間はどちらが正しいか」。それが見つからないと見えない客の気配も見えない。現代の若者らしく、もうひとつ掘り起こした挑戦の舞台が観たかった。辛口になりましたが、そんなことを考えさせてくれる舞台でした。

団のぼる

ミュージカルプロジェクト「M.Pink」

「真夏のトレジャー」

脚本：熊手 竜久馬(虹の素) 演出：笹浦 暢大(うなぎ計画)

9月28日～30日 於：神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

この話の内容は、夏休み明け前に行われる学園祭で最後の思い出を作りたい女の子の話と、おばあちゃんからの宝の地図を手に入れた子供たちの話の、ふたつのストーリーが進行し、最後に重なり合うというものだった。

ほのぼのとして明るく、観る人のこころを温めてくれるようなストーリーであった。舞台装置もカラフルな色遣いで、ストーリー全体の明るさを表していた。コの字型の客席ということもあって、役者が後ろを向いた際に、セリフが少し届きにくいことがあったが、コの字という特殊な空間を余すところなく利用した装置や、役者の立ち位置であった。

照明や音響もやわらかな印象でストーリーを後押ししていたように感じる。明るくほのぼのとしたシーンの連続の中でも、観る人が焦燥感を感じるような、それをあおるようなシーンの切り替えがあり、それに付随した照明や音響効果があったように思う。

ミュージカルということで楽しみにしていた歌や楽曲、ダンスの部分も、ストーリーや出演者にあったものが多く、様々な種類のものが取り入れられ、躍動感があった。観劇前は、幅広い年齢層の方が出演すると聞いていた。だが、予想より多くの方が出演されていて、特に子どもたちの多さに驚いた。そしてそのたくさん子どもたちがとても楽しそうに演じ、歌を歌っている姿が印象的だった。



小学生たちは、ダンスでは小さな体を思い切り動かし、指先まで力が入った懸命さを見せてくれた。また歌やセリフは大きな声をだし、精一杯の力で自身をアピールしてきたように思う。中学生や高校生たちは、

1人1人が自分の役に真摯に取り組み、役作りを行って、一生懸命に芝居に取り組んでいたように見えた。

予想を上回る数の子どもたち。そしてその真剣な演技に、楽しさを覚えた芝居だった。また、日常生活では、あまり身近に感じることはないものであろうミュージカルという分野だが、この芝居は、幅広い年齢層の役者たちが、ミュージカルというものをより身近に感じさせてくれた。そういった意味でも、今後の活動に期待している。

風雲かほちやの馬車：西田恵実

横浜小劇場

朗読劇「十二人の手紙」より

脚本：井上ひさし 演出：飯田克衛

10月13日・14日 於：神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

朗読劇を拝聴させて頂き有難うございました。各手紙の会話の全部の内容は覚えられませんが、大体は理解したつもりです。

しかし、朗読と云う形で伝達する方法は私達子供の頃、親や先生などによく昔話やおとぎ話などしてくれた様に気持ちが和みました。

現在の社会で人間関係の心

の触れ合いが悪くなっている今日、やはり同じ言葉や顔の表情を持って接する事は大変大事な事だと思います。話の内容も客観的に聞いても色々な想像的展開があつて良いと思いました。

劇団かに座：堀正弘



劇団こゆるぎ座

「一分立つ」 脚本：野村信太郎 演出：楠田正宏

10月27日・28日 於：小田原市民会館大ホール

初めて観劇する小田原の劇団こゆるぎ座。小田原城がすぐ目の前にある小田原市民会館は1000人ホールで、客席はほぼ埋まっていたが、例年より少ないとのことだった。ともあれ1000人ホールを埋める劇団の芝居とはどんなものか、楽しみでした。今回のお芝居は、過去歴史にあった浅田兄弟による仇討の話。

小田原では曾我の兄弟の話は有名だが、こちらの仇討は江戸幕府最後の公許の仇討だということ。演目の「一分立つ」とは、「面目が立つとか、「名誉が保てるとかの意味があるが、何をもって「一分立つ」なのか。それらのことを踏まえても見逃せない舞台である。

大ホールなので、たっぷりとした空間に、大きな時代物の舞台セットの中で、静かに淡々と芝居がすすむ。その第一印象は「歌舞伎」のようなお芝居でした。

場転換に時間がかかるので、数分に感じられる暗転には最初驚いたが、このゆったりした芝居の空間では当たり前なのだろうと、受け入れられた。が、場割りのデジタル版が転換明け直前に現れるので、読みとりにくかった。

第一景で、いきなり殺人がおこり、家長を失った浅田家が存続のため、遺族兄弟による「仇討」と相成るのだが、終盤、「討たれる武士」に照明スポットが当り、「彼の一分」を



表現するならば、殺人が起きた原因、更に、町人に成りすまし生きてきた彼が何故「討たれる」ことを覚悟したのか、あたりを、(いきなり覚悟が出来たように見えたので)もう少し丁寧に描いてほしかった。仇を討つ側の「一分」と討たれる側の「一分」のそれぞれのエピソードのインパクトがもう少しあったら、より伝わったと思いました。しかしながら、役者の力量の差もあったが、役者の個性や真摯な芝居は伝わり、このゆったりした空間で史実の物語を観ることができたのは貴重である。

ここ数年は、小田原の史実に基づくオリジナル多幕物の作品を上演し、郷土小田原の歴史を広く市民に紹介し親しまれているという。それで、客席が埋まることも納得である。小田原城を見上げながら、この地に流れる時間や空気が横浜にはないものを感じ、この地から湧きおこる創造物に期待し、小田原に在るこゆるぎ座の存続を応援したいと思いました。

まりこ☆みゅーじあむ：川井真理子

横須賀市民劇場プロジェクト

「ここは逢連荘」 脚本:かんだまさみ 演出:羽賀義博
10月27日・28日 於:横須賀市立青少年会館ホール

この劇団がはじめて創作劇に取り組む舞台、作者は劇団員ということでどんな芝居を見せてくれるのか興味ふかく観劇した。

舞台は「ある日ある場所に集まった人々。どうしてそこにいるのか誰も知らない。そこがどこだか誰も知らない。…ここは逢連荘と呼ばれているらしい。でも、このアパートに集う多種多様な人たちにとってどうでもよいことで逢連荘は単なる記号にすぎないのかも知れない。登場人物たちが自分たちの意見をのべる場が必要でベケットの「ゴドーを待ちながら」のエストラゴンとウラジミール、そしてラッキーとポゾが存在するための空間のようなものなのだろうか。とすれば不条理劇なのか。判らないことは沢山ある。逢連荘に集う多様な人たちがなぜあそこに集まったのだろう。

最後にどうしてひとりだけ残ったのだろう。などなど…登場する12人の人物はそれぞれに自説を述べる。それが



全体としてカオスの状態を舞台に充滿させる。作者あるいは演出者はカオスのなかに不条理の劇を志したのだろうか。芝居を創ったひとたちに言わせれば、「それはお門違い…」と言うかも知れないが、わたしにはそう見えた。

新たに出発の作者の処女作を横P. のひとたちが総掛かりで取り組んだ舞台には熱気があった。観客席も満席でよかったとおもいます。

ひとつ注文をつけるとすればわたしのような高齢者にもストーンと判るようなわかりやすい創作劇を次回は見せてほしいということです。もちろん、これはみみずのたわごと。

横浜小劇場：荒井賢一

劇団麦の会

「南東の風 やや強く」

脚本:岩田能子(いわたかproduce) 演出:小金井敏邦、新谷美智子
11月10日・11日 於:神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

あ る病院の屋上が舞台。そこへ入院患者や看護師たちが集まってくる。入院患者なのに包帯を巻いている人もいないし、花見でお酒を飲む計画を立てたりしていて、見た目はとても元気そうに見える。でも入院生活は長そうだ。

この人たちは一体何の病気なんだろうかと思いつつ見ていくうちに、この人たちは不治の病なんだということがわかってくる。普通の人よりは死の影を身近に感じているはずだろうに、皆達観しているのか、ニコニコしている。ジタバタする人がいないのだ。入院患者同士で感情的に本音をぶつけ合うことはできないかもしれないが、看護師や家族を相手に不安や悔しさをぶつけるような場面があれば、笑顔で会話する患者たちの存在感も厚みが出たのではないだろうか。いや、ジタバタする時期を乗り越えて今は穏やかに毎日を暮らしている、本当は不安で不安で泣き叫びたいような夜を過ごしているのだけれど、あえてそういう部分は出さず、辛さをぐっと押し殺して今日を生きている、というふうに見ることもできる。でも私は正の感情も負の感情もさらけ出すナマの人間を見たかった。淡々と進行していくこのストーリーに物足りなさを感じた。

あと気になったことをいくつか。①SEで学校のチャイムが鳴り、近くに学校(小学校?)があることが表現されていたが、もう少し工夫できたように思う。学校は生命力の象徴みたいな場所であ



り病院との対比が出ると思う。運動会云々のセリフがあった時に子供たちの歓声がSEとして使われていたが、それ以外でも(セリフに出てこなくても)例えば合唱やリコーダーを練習している音がセリフの合間に小さく聞こえていたりすると、これから成長していく子供たちと残りの時間が限られている者たちの対比が出て、役者の表情(間)だけで何とも言えない哀しみが表現できるのではないか。チャイムの音はけっこう大きくはっきり聞こえていたのに、それ以外の音がなかったことが残念だった。②正面にあるドアが開けられる度に中が見切れてしまい、興ざめだった。舞台周りも茶色の衝立がむき出しで置かれており、もう少し

気を遣っていただけると有難いです。③麦の会は新人がたくさん入って来て(羨ましい!)勢いのある劇団です。オリジナルの喜劇もいいけれど、たまには麦の会の違った面も見てみたいと思っていたので、今回のような既成のシリーズ作品は新鮮な気持ちで見ることができました。願わくばベテラン役者(大麦?)たちの「これぞ芝居!」みたいなものも見てみたいです。

劇団よこはま壺座:熊谷浩子

演劇プロデュース『螺旋階段』

「LOVE HOTEL」 脚本・演出:GREEN

11月10日・11日 於:小田原生涯学習センターけやき

不思議な探偵物語と銘打って、笑いあり・ファンタジーあり・恋愛あり・パフォーマンスあり、と盛りだくさんの内容でした。でもいろいろ詰め込んだ割にというか、詰め込んだせいでというか、最終的にぼんやりした印象になってしまったような気がします。

もう少し起った出来事についての説明というか裏付けが必要だったかもしれません。この芝居の中でどうしてこれが必要なのか、どうしてこの人はこう言ったのか、など…。観客の想像にお任せします、というところなのでしょう。

しかし、役者はあまり条件のよくない劇場であるにも関わらず、セリフが聞こえないようなこともほとんどなく、きちんと役どころを押さえていました。舞台は、ホテルの窓の景色を映像で映し出していたりして、本当に街中にある少し寂れたビジネスホテルっぽい感じがとても出ていて良かったです。

今回はちょっと残念でしたが、まだまだ隠し持った手札がありそうなので、次回はどんなものを観せてくれるだろう、という期待が出来る作品でした。

劇団河童座:浅葉久美子

ヨコスカ・ベアフット・シアター劇場

「真夏の夜の夢」

作:ウィリアム・シェークスピア 訳:松岡和子 演出:吉本敏克

11月10日 於:横浜にぎわい座のげシャール(小ホール)

シェークスピアの喜劇「真夏の夜の夢」。結婚を控えている男女や人々の間に起こる騒動が妖精の魔法によって引き起こされているというお話。

何となく内容は知っているという程度の私。改めてあらすじを読んだところ、こんなにも人間関係が複雑なのか…と不安を感じ周りを見回したところ、小学生もちらほら。お友達が出演しているのかしら?物語の要である「妖精」豆の花、蜘蛛の糸…歌の上手な子どもがいたのが印象的。大人たちの言い争いが続く中の癒しのシーン。折角あるスクリーン、照明などで、華やかなシーンにしても良かったかな。

全体的に何か物足りない。どうしても、舞台上にいるのは少人数。一人のセリフが長くなってしまいうので、セリフが聞き取れないと頭の中は、「???」。休憩なしの

2時間強…だんだんとミスが目立ちはじめ、役者が不安になってきているのが伝わってきてしまいました、残念。

ただ、中には表現付け、セリフ回しが上手な人も。古典的なテーマとフライヤーデザイン、会場の雰囲気は良くあっていました。

ミュージカル プロジェクト:板澤桂子



劇団蒼い群

「検察側の証人」 脚本:アガサ・クリスティー 演出:福本幸男

11月10日・11日 於:横須賀市立青少年会館ホール

ニステリーの舞台を見たことがなかったので、上演時間2時間40分くらいという前説で、場面がどんどん変わったり、法律の専門用語の難しい台詞がいっぱいでわからないことがあったりするかもしれないと身構えてしまいましたが、おもに法廷の場面中心だったにもかかわらず、特に複雑すぎてわからないといったことはなく、その長さを感じさせない展開でした。善良そうな男性が資産家の女性の殺人の容疑で逮捕されてしまい、その後の裁判が主な舞台となるのですが、判決までの証言の数々が、実に男性に不利なものばかり。

そして、男性の妻までもが不利な証言をする中、謎の女性が弁護士事務所に表れ、裁判の流れを大きく変えてしまいます。

そのあとがさらに衝撃のラストなのですが、原作を知らなかったので、アリバイ崩しのトリックだとか真犯人の罠だとかそういったものが出てくるのかと思っていたところ、実はそうではなく、本当に驚きました。

また、それぞれの思惑が交錯していて、ただのこじつけのような謎解きではないところが、非常に良かったと思います。チラシの「結末は決して話さないで下さい」という言葉通り、最後まで目が離せない展開で、最後まで飽きることなく見ることができました。大きな場面転換があるわけではなく、弁護士事務所と裁判所だけしか出てこないのですが、それぞれの証人の台詞によって、その場面を想像し、自分が陪審員になったような気持ちになりました。特に、男性の妻役の延田さんの熱演で、最後まで衝撃のラストが想像できず最後まで楽しめました。

またこういった作品を上演するならばぜひ観たいと思いますし、ミステリーを観たことない方にもぜひお勧めしたいです。

劇団やぶさか 浅水真子



劇団かに座

「夜の訪問者」

作: J. B. プリーストリー 訳: 内村直也 脚本: 八木柗一郎 演出: 田辺晴通
11月16日・18日 於: 関内ホール 小ホール

ストーリーとしてはミステリー調で、謎ありどんでん返しあり、話が進むにつれそれぞれの秘密が暴露されていき、それぞれが葛藤していく人間模様。ミステリー小説好きの自分としては好物でした。ついには書くと、かなり有名な作品らしいのですが、まったく知らず自分の不勉強を反省してしまいました。装置も良く出来ていて、特に暖炉。レンガ作りの暖炉を見た瞬間に「この家はセレブだ!」と納得。「あの暖炉ならサンタクロースも出入りが楽だろうな〜」(これを書いているのは11月末)とどうでもいい事まで考えてしまいました。

最終的には刑事の正体がわからないまま終わってしまったのですが。結局あの男は何者やねん? 自殺した女性の親? 兄弟? もしかして恋人? …あれ? もしかして、これって作者の狙いにハマっちゃってる?

劇団麦の会: 三嶋洋一



劇団河童座

「33人」 脚本・演出: 横田和弘

11月17日・18日 於: 横須賀市立青少年会館ホール
12月 8日・ 9日 於: 相鉄本多劇場

「33人」とは? 33人と聞いてすぐにぴんと来る人は少ないかも知れません。これは2010年に起きた、チリの鉱山落盤事故で地下に閉じ込められた人数です。物語は、地震で地下100メートルに作られた核シェルターの展示場「カイカン」に閉じ込められた11人がチリの事故と同じ69日間の地下生活を余儀なくされる、というところから始まります。

シェルターの11人と首相官邸、対立する党首、マスコミの関係がテンポよくシニカルな笑いを込めて描かれ、休憩なしの2時間があっという間に過ぎました。特に、生き埋め事件を支持率アップに結びつけようとする首相と秘書のやりとりは、とても楽しめました。現在の政界をほうふつとさせ、随所に取り入れられた時事問題のパロディには、

「そういえば、そんなニュースもあったな」と思わずクスリとさせられました。また、電話の合間にするっとな出てくる漫画的な擬態語や、首相が変装して自ら買い物に出向く、など笑いを大いに誘っていました。



核シェルターを下に、テレビ局と首相官邸を上配置した2階建てのセットは、場面転換がとてもスムーズで、気持ち切れることなく観劇できました。

舞台の転換の役である「時告げ鳥」は、冒頭に時間や場所、状況を説明してこの物語のスタートをウキウキした気持ちにしてくれました。ただ、後半、登場人物の心情的な説明をしすぎて話が先取りされ、客席でいろいろ想像してドキドキするものが無くなってしまったのが残念でした。

11人そろってのシェルターの場面の稽古は大変だったことと思います。異なる境遇の11人が1箇所閉じ込められた後、時の経過の中でいさかみや歩み寄り、理解等の交流が生まれるところをもう少し細やかに表現してほしいと思いました。時告げ鳥の場転が終わって、シェルターに場面が戻ったとき、明りが入る前に気持ちを作っておいてほしかったです。

地域劇団として今回で215回という異例の公演回数を誇る劇団河童座。創立60周年を迎えられたこと、まことにおめでとうございます。

劇団「横綱チュチュ」: 安次嶺里絵子

風雲かぼちゃの馬車

「With me, Without」 脚本: 堀浩隆 演出: 土井宏晃

11月22日・25日 於: 横浜相鉄本多劇場

相鉄本多劇場に到着して中に入るともうお芝居が始まっているような異様な熱気を感じました。約20分の間それは続いていのように思います、終わりのころになると前



説がはじまりどうやらこれはまだ始まっていないのだと気づきました。何しろ演劇、いや演ずるのが好きなのか、人前に出るのが好きなのか元気いっぱいな俳優陣十数名の登場には圧倒されました。しかしこれはナンセンスなお芝居の幕開けになろうとは思いませんでした。それは本編のお芝居の中での「夢や愛や友情などからむ重要なプロット」がしっかりと芝居の構成、観客への訴えにささえられていないがためだと思います。女性3人により乗っ取られてしまった本職の海賊もありえないし、とりもどす宝の箱も見たとこ手提げ金庫のようなものにしか感じず、命をかけるほどの宝ではなかった。最後のめでたしめでたしも、悪玉船長が仲間殺されてしまうのも、とってつけたようなお芝居の終わりになっていた。

これを芝居として成り立たせる方法としてはすべてを笑い飛ばせるようなナンセンス(価値観にこだわらない)芝居にすれば、あまり言葉や筋立てなど選び考える必要はなくなるように思いますがいかがでしょう。しかしそうはいつでも私にはそういうことはできませんし、かぼちゃの馬車のみなさんのようなお芝居もとてもじゃありませんができません…。

劇団 蒼い群: 村田次郎

劇団「横綱チュチュ」

「あれは、春かもしれない」

脚本:菱倉 あゆみ 演出:団 のぼる

11月23日・24日 於:磯子区民文化センター 杉田劇場

初めて観劇
する劇団

「横綱チュチュ」
4回の公演は、
ほぼ売り切れと
の事。

このチケットが
売れない時節
柄、素晴らしい。



無理を言って11月24日の14時の回を観せていただきました。劇評とは関係ありませんが、ここの制作スタッフは、おそろしく感じが良い。最近の若い制作スタッフは、キビキビやってるのだが、サービスという事はき違えていて、入口から不快になる事も少なくない。ここのスタッフは、心から「よく来ていただきました。」という気持ちが伝わってきて、とても好感が持てた。

さて、ほぼ満員の杉田劇場、観客は子供から、お年寄りまで幅広い。開演後も、がやがやして、途中席を立つお客様もいて落ち着かない。

さて、物語。観客席から現れる色とりどりの傘をさした出演者が登場。さすがにフランチイズ、劇場をよく知っている演出。視覚的に引き込まれた。話は日常よくある老人ホームの物語。キャストの誰もが、我々の身近にいそうな人物で、多分小学生から老年まで、達者な人もいれば、そうでない人も。しかし、その誰もが、よくある日常を表現する。笑いあり、涙あり、そして深い問題定義も盛り込んで、押し付けがましくなく演じている。時には客席まで使って。

紗幕を使った転換、灯り、生演奏の音響、優しく混じり合っていて、気付けば物語に引き込まれていた。出演者、スタッフ、観客その全てが混ざり合っていて、横綱チュチュの芝居は出来ているんですね。知り合いの出演者が出てくれば、がやがや、共感できる台詞や場面ではがやがや。それも気になるところか、芝居に混じり込んでいるように思えるから不思議。

アマチュア演劇、地域演劇の真髄を大いに認識し、楽しませていただきました。

H & Bシアター : 別府寛隆

京浜協同劇団

「人のあかし〜ある憲兵の記録から〜」

脚本:和田 庸子 演出:藤井康雄

11月30日〜12月2日・12月7日〜9日 於:スペース京浜

川 崎駅を降りてバスに揺られ住宅街の中の3階建ての小さな劇場にたどり着く。京浜協同劇団の「人のあかし〜ある憲兵の記録から〜」を見るために。

物語は約70年前に中国で日本人憲兵として生きた渡部正一の語りである回想から始まる。そして戦場で鬼と変わる。撫順戦犯管理所での6年間と人となつてからの語りで物語は進む。今回の舞台を観劇したことで、国賠同盟、撫順の奇蹟を受け継ぐ会、日中友好協会というものがあるのも初めて知りました。

この台本をやることになったことが決まってから様々な取材をされたそうです。ただ普通に暮らしていた百姓の息子が、その時代に生まれたが為に兵隊になり、鬼のような人間になってしまう。その時代に生まれた方々を不憫に思い、この時代に生まれた自分に感謝をしました。



初めて京浜協同劇団の芝

居を見せていただき、今公演のあらすじや内容の深さに、涙・涙・涙を覚悟で臨んだわけですが、ジーンとくるシーンがあったものの今一つ感動が薄く感じてしまったのは何だったのか…。主役の渡部正一役の護柔一さんの熱演や中国人看守役の藤井康雄さんの優しさは十分に伝わった。主役の渡部正一さんが自らの手で殺害した中国人の遺族を訪ね詫びるシーンで渡辺の遺族への詫びに小さくでもうなずいてくれたら、中国人のそこはかたない優しさに涙が出たのではないかと思っただけ…。そこは、そうまでいかなかったのでしょうか。

この、重く深いエネルギーを要する作品を10ステージもこなす素晴らしさ。ますますの活躍、活動を期待しております。

演劇プロデュース『螺旋階段』: 田代真佐美

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- H&Bシアター●演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座
- 劇団こゆるぎ座●劇団麦の会●劇団やぶさか●劇団横綱チュチュ●劇団よこはま壱座●風雲かぼちゃの馬車
- まりこ☆みゆーじあむ●ミュージカルプロジェクト●横須賀市民劇場プロジェクト●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>

別冊DRAMAかながわ[第2号] 発行日:2013年1月31日 発行:神奈川県演劇連盟

編集:緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)・浅水真子(劇団やぶさか)・海老名信吾(劇団よこはま壱座)・関口素実・山元洋一(外部協力)